

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く

138

京極高知と関ヶ原

―ふるさとの大名奮戦記①―

京極兄弟の関ヶ原

映画「関ヶ原」の公開や、石田三成と観音寺に関するイベントが開催された昨年。まだまだ三成ブームは続きます。今回と次回は、三成側（西軍）ではなかったものの、東軍の主力として、また、前哨戦の大津籠城戦で奮戦し、若狭一国（福井県嶺南地方）と丹波一国（京都府北部）の国持大名として並び立った、米原市ゆかりの京極高知・高知兄弟の関ヶ原合戦を紹介いたします。

京極家は、鎌倉時代の仁治二年（一二四一）に近江の守護大名佐々木信綱の四男氏信が、愛知川以北の北近江六郡（愛知・犬上・坂田・浅井・伊香・高島）を与えられ、清滝に居館と菩提寺を置いたことに始まります。バサラ大名京極道誉、応仁の乱で東軍（細川方）の主力だった持清、上平寺城主高直などを輩出して、鎌倉時代から戦国時代中頃まで北近江を支配します。しかし戦国時代後期に家臣の浅井亮政が台頭し、永禄三年

（一五六〇）孫の長政が浅井家の家督を継ぐと、京極高直と高吉（高直の子）は北近江を追われます。

永禄十一年（一五六八）八月十七日、高吉は鎌倉時代から続く名門京極家のプライドをなげうって、柏原の成菩提院で上洛途上の織田信長に謁見し、息子高次を人質に差し出し、京極家の復興を高次に託します。その後の高次の実績は次回に書くこととして、今回はあまり知られていない弟高知を紹介します。

天下統一をなした羽柴（豊臣）秀吉は、農民の出自とされその政権は脆弱なものでもありました。秀吉は親類大名、元同僚の旧織田家家臣、服属した戦国大名に「豊臣」の姓と「羽柴」名号、公家の位を与え「一門衆」として政権の安定を図ります。その数五二家一〇五人。なかでも、京極家は高次の妹竜子（松の丸）が秀吉の側室となり、高次は秀吉の側室茶々（信長の妹市の長女）の妹初を妻としたことで、秀吉の有力な親類大名になり

ます。ちなみに初の妹は二代將軍徳川秀忠の正室江です。

京極高知と信州飯田城

兄高次同様、高知にも京極家復興が託されました。高知は最初、織田一門の織田信澄の娘を妻にしますが、のちに織田家家臣の毛利秀頼の娘が後妻に入ります。秀頼は、当時信濃国飯田城主でしたが、文禄二年（一五九三）、朝鮮での戦傷がもとで亡くなり、娘婿の高知が飯田一〇万石の領主になります（二二歳）。

さて「飯田」といえばリンゴをイメージする南信州伊那谷のおだやかな小京都。戦国時代、それほど重要な土地だったとは思えません。しかし飯田は、西に木曾山脈、東に南アルプスが育む良質な森林地帯の中心都市です。秀吉の大阪築城では、高知が差配して飯田から木材が上方に運ばれています。江戸時代の飯田周辺は幕府直轄地となり、飯田に代官が置かれ、彦根城など相次ぐ天下普請の木材供給地となります。次回述べる兄高次が、信長・秀吉の近江支配にとって重要な大溝城（高島市）・八幡山城（近江八幡市）・大津城主を歴任したのと同様、高知も

若年ながら豊臣政権の要地を任せられていたことがわかります。

慶長五年（一六〇〇）六月十八日、上杉討伐に向かう途上、家康が大津城に立ち寄り高次・高知兄弟と膳を共にします。高知はそのまま家康に従い、八月二三日には岐阜城搦手攻略に一番乗りの功名を立て、関ヶ原では東軍左翼第二陣として藤堂高虎隊とともに宇喜多秀家隊と交戦し、午後には大谷吉継隊を撃破します。戦後、高知は丹後一国一二万三千石（宮津藩）を拝領します。

（歴史文化財保護課）



▲京極高知像（京丹後市常立寺蔵）